

＜資 料＞

アメリカ精神史を画する制度主義 (1)

アントニオ・モンターネル著

佐々野 謙 訳

訳者はしがき

ヨーロッパには、制度主義・学派についての文献は決して豊富ではない（松本正徳「ヨーロッパにおけるヴェブレン研究」商学論集，第16巻第6号，43頁）。従ってその研究者の数も少ないと言える。ちなみに，アントニオ・モンターネル（Antonio Montaner）は，制度主義研究者として戦前より知られたドイツ語圏の学者であり，彼には制度主義思想上重要な著作がいくつかある（川崎進一「アントニオ・モンターネルの＜制度主義＞について」新潟大学，法経論集，第7巻，55頁）。『アメリカ精神史を画する制度主義』（Der Institutionalismus als Epoche amerikanischer Geistesgeschichte, Tübingen, 1948）は，その彼の代表的著作の一つである。かつて私は，このモンターネルの著作にそくして，彼の制度主義についての見解を「制度主義の全体像」第一経大論集，第5巻第2号，第6巻第1号において，整理・紹介した。ところでこの小稿は，そのモンターネルの著作全体の訳出・紹介を試みようとしたものである（但し当紙面の都合上，その掲載は，以後数回に分けて行うことにした）。なお付言すれば，モンターネルの制度主義についての著作には，上掲書の他に『制度主義の基礎と方法論』（Grundlagen und Methodologie des Institutionalismus, Wirtschaftspiegel, Wiesbaden, 2, 1974）がある。またドイツ社会科学辞典（Handwörterbuch der Sozialwissenschaft, 7. Lieferung, ss. 294-297）には，「実に要領のよい簡潔な解説」と評価される，彼の制度主義についての小論を見ることができる。

さて、以下その訳出を試みようとする モンターネルの著作、つまり『アメリカ精神史を画する制度主義』の全体の目次構成は、次のようになっている。

目 次

- I. 制度主義の概念と起源
 - A. 社会科学的範疇としての制度
 - B. 制度主義の精神的根源
- II. 精神的現象としての制度主義
 - A. 制度主義集団の主要代表者
 - B. 制度主義の全体的評価
- III. 制度主義とそのヨーロッパとの照応ないし類似の学派

I. 制度主義の概念と起源

A. 社会科学的範疇としての制度

「制度主義」の概念と本質を明確にしようと望むなら、人はさしずめ、「機関」, 「制度」および「制度化」という用語の論理的に展開された語義を明確にすることに努めなければならない。社会形象に関する文献で、特に人目をひくのは、「それで社会形象が把握される概念に明白さが欠けているということだ。問題の語源学的側面が顧慮されないままであったということが、恐らく甘受されるであろう、それは最良の社会経済学の伝統には反することなのだ¹⁾」。すでに、全く科学的な言語慣用は、多くの現在使用されている何々「主義」という用語を、そのおのおのの語根にまで逆のぼって定義するということを教えている。すなわち、資本と資本主義、国家と国家主義、知と主知主義等々がそうした関係にある。語根はきわめて種々な生活・知識領域に発するのに、この語根に付属している何々「主義」とは、概して、それが付属している語根概念と内的必然的に結びつけられた表象および思考複合体を「一面化」することによって形成された世界観、生活信条、理論、哲学的あるいは一般的・科学的志向、信念、立場——これらは個々の場合に妥当する意識視点の有限性によってのみならず、それと同じく通常、すでに表象として存在している理念を実現しようとの、それらに固有の現実化原理によっても特徴づけられている——を示して

いる。そう考えると、この何々「主義」のいずれにも、少なくとも傾向的な一面性という欠陥が、意識的であれ無意識的であれつきもののだといえるが²⁾、この欠陥は、まぎれもなく、我々の精神生活がもつかの不可量性の一つ、つまり自然の不可解さに対する人間の包括的知識や認識能力には今なお限りがあるということから説明されるべきものの一つとなる。と言うのは、究極的な客観的認識を得ようと努めているいかなる人間精神にも、常に主観的な幻想がつきまとうからだ。しかしだからといって、科学者としての人間が、自然やまた我々の存在に関する多くの問題を断念するにはおよばない。と言うのは、人はその研究を主観的な影響や主観的な附加物からまぬがれさせようとすればするほど、また同一方向に向けられた科学的思考の全体と絶えず精神的な交流をもてばもつほど、それだけ「客観性」という理想や「真理」という全体知識に、いちだんと接近することになるからだ。例え、＜汝自身を知れ＞ということに、主観的な自己幻想の体系は対立しているにせよ、ニツチェ (Nietzsche) が認めたように、人間精神は、かかる自己認識を通して、およその精神の妥当性の主張に対する正しい方策とともに、その認識努力にとっての正しい出発点もまた獲得するのである。「望みなくては、神秘的な思いがけないことは見出しえない」 (Heraklit)。

1) Bernhard Harms, Der Begriff der Weltwirtschaft, in: Weltwirtschaft. Archiv 23 (1926I), 157.

2) これについては、José Ortega y Gasset, Historia Como Sistema y Del Imperio Romano, II. Aufl. Madrid 1942, 119 を参照せよ。

何のために我々は以上のような省察をし、一見本来のテーマからはずれたのかということは、先に掲げた定義上の先決問題に我々が答えようとするや、直ちに明らかになる。と言うのは、すでにここで、我々は科学のもっぱら専門用語に関する争い——この争いは単に専門科学上の制限された視点の転置の結果というだけではなく、まさしくかの主観的な見解の不一致の結果でもある——を起しがちであるからだ。さてここでは、社会学的関連における諸概念が関心事であるから、我々はその概念を解明するのに、さしずめ主として、レオポ

ルド・フォン・ヴィゼ (Leopold von Wiese), すなわち彼の『一般社会学体系¹⁾』の叙述を追ってみる。——と言うのも、ヴィゼのこの書が、ここに吟味されるべき社会科学上の諸概念を詳細に論述しているからだ。

- 1) Systems der Allgemeinen Soziologie, II, Aufl., München und Leipzig, 1933.

ヴィゼは、〈機関〉および施設を、「群集」と「集団」という二つの範疇と並ぶ「集合体」のうちの) 社会形象, つまり何んらかのそれを組織している意志によってその存在と状態を維持する社会形象と定義する。この社会形象のもとで前景に出てくるのは、人間の目的設定や合理的なものだ。従って、この社会象を分析するのに、社会過程の研究をしてみても、それは社会形象の中に表明された人間の意志の解釈ほどにはけっして役立たない。

ヴィゼは、機関という概念から〈制度〉という概念を切り離して、この制度を、機関(施設)の中にその客観的な象徴化された表現を見出すことのできる、一定の人間間の関係形態の複合体と定義する。

社会現象を、正常(健全)な社会のそれと、破壊と攪乱の現象、つまり異常(不健全)な社会のそれとに類別するシェッフレ (Schäffle) は¹⁾、それとの関連で社会静学と動学とを区別し、さらに社会現象を(発展を度外視した)「恒常現象」と(歴史的および政治的な特徴をもつ)「生起し進展してる発展の現象」とに分けている。こうした2重の二分割の中で、彼の場合に有効なのは、第三のもの、すなわち「一方での〈組成体〉つまり〈組織〉あるいは〈制度〉による社会現象の部分と形態への分割、他方での〈作用〉あるいは〈機能〉による社会現象の部分と形態への分割だ。

- 1) A. E. Fr. Schäffle, Abriß der zoziologie, Tübingen, 1906, 7.

フランツ・オッペンハイマー (Franz Oppenheimer) は、彼の『社会学体系¹⁾』の中に、制度についての詳細なカタログ²⁾を与え、その多くの制度(法、慣習、儀式、憲法、行政)を、集団の成長とともにますます増大している団体

反動を規制するという目的をもつ、社会的抑圧機構の部分だとみなしている³⁾。デュルケイム (Durkheim) にならって彼・オッペンハイマーは、社会学を「制度に関する科学、その起源と機能に関する科学⁴⁾」だと定義する。

1) F. Oppenheimer, System der Soziologie Jena 1923.

2) Oppenheimer, a. a. o., 468.

3) Oppenheimer, a. a. o., 453.

4) Oppenheimer, a. a. o., 827.

機関および制度が社会<形象>を表わしているのに対して、<制度化>とは一の社会<過程>を意味する。この社会過程としての制度化を正しく解釈できるように、何よりもまず、社会過程のもつ多様性を体系的に整序することが必要だ。ヴィゼは、彼の「社会過程の全素描」の中で、垂直的および水平的という区別を行う²⁾。垂直的なものは、a) 結合の根本過程、b) 分離の根本過程およびc) 混合過程とに分れる。水平的なものは、a) 第一次の過程（「一般的・人間的な種のもので、必ずしも以前に形成された形象の存在を前提としない過程」）と、b) 第二次の過程（「社会形象内またはその間の過程」）とに分れる。第一次の（単純な）過程は、一般的・人間的関係をもたらし、第二次の（錯綜した複雑な）過程は、形象の特色ある形成と結合をもたらし。ヴィゼは、簡単にするために、結合の一般的・人間的過程をA過程、分離の単純な過程をB過程、（結合の過程でもあり分離の過程でもある）単純な混合過程をM過程と呼ぶ。錯綜した過程のもとでは、結合の過程がC過程、分離の過程がD過程である。AとBが一緒になって第一次の社会過程を成し、CとDは一緒になって第二次の社会過程を成す。（より立ち入った解明は、『体系』から推察できよう²⁾）。これらの素描されたすべての整序視点と子母記号を基にして、ヴィゼは、以下にみる「社会過程についてのシェーマ」を作成する。

社会過程のシエーマ (ヴィゼによる)

結合のA—過程	分離のB—過程	M：混合過程
I. 第一次の過程		
A a：接近	B a：弛緩	たとえば 競争
A b：適応	B b：排除	
A c：均衡	B c：解放	
A d：合一	B d：離反の達成	
II. 第二次の過程		
C a：画一化	D a：不平等の成立	
C b：秩序化	D b：支配と服従	
C c：社会化	D c：等級別と属化	
	B d：淘汰（選択）	
	D e：個性化、分化および疎遠	
E a：制度化	F a：搾取	
E b：職業化	F b：依託と買収	
E c：解放	F c：形式主義と化石化	
	F d：商業化	
	F e：過激化	
	F f：倒壊（錯行）	

1) von Wiese, a. a. o., 175f

2) von Wiese, a. a. o., 176ff. 次も同様。オートウ (Auto) は、社会過程を描写することによって、社会形象に関する彼の学説——これはむしろ静態的視点に照応する——とは対比的な、社会生活の動態的分析を目指す。「形象のうちに、強力な絶えざる生活の奔流がいかにかけめぐっても、その場合の形象ですら、かなり永続的なものと考えられる。だが、その形象そのものの不断の滅亡と新生、また形象間の生活、非人格的な形象の型、およびこれらの集合体の崩壊もまた顧慮されなければならない」(177)。

このシエーマからわかることは、ヴィゼが＜制度化＞を（「内的、倫理的に把握されうる解放と並ぶ」）、（第三の職業化と同じく）おおむね外的な種の構築規則の総和をそのうちに含む、形象の構築・再構築の主要過程の一つとみなしていることだ。

さしずめ＜制度の形成＞が前景に出ているのは、ある形象の前進的な構築の前提としてである。チャールス・ホーソン・クーリー (Charles Horton Cooley) は¹⁾ 制度をこう定義する。制度は、「その究極的な本質においては、公的見解となら異ならない、公的精神の一定の確立された局面だ。だが制度は、その

永続性やそれがまといっている目にみえる慣習や象徴のために、何か明白な独立した存在をもつものだ、としばしばみなされる。それ故、由緒のある会合、広大な古くからの権力、文献、建物および事務所をもつ政府や教会は、民主的な人々にとってさえ、人間考案の単なる産物——もちろんそうであるのだが——とは考えられない。だがいかに大きな制度であれ、それは人間の思考が長年特定の課題に向けられているとおのずととるかの組織の産物なのであり、従って一定の形態、つまり持続的な感情、信念、習慣および象徴がしだいに結晶化したものだ。ヴィゼは、このクーリーの定義を批判的にとりあげて²⁾、クーリーは解明の困難をそれ自体一つの解釈を要する「公的精神」や「公的見解」という概念にすりかえている、と異議をとる。そして、制度を概念と構造とに分けるウィリアム・グラハム・サムナー (William Graham Sumner³⁾) の解釈——これは制度を研究するための作業原理としてヴィゼも認めるところのものだ⁴⁾——を引用する。

1) Charles H. Cooley, *Social Organization (A study of The Larger Mind)*, New York, 1923, 313.

2) Von Wiese, a. a. o., 330.

3) William G. Sumner, *Folkways (A study of the Sociological Importance of Usages, Manners, Customs, Mores, and Morals)*, Boston/New York 1926, 53. 「制度や法は慣習から生み出される。制度は概念（考え、観念、教義、関心）と構造から成る。構造は、一定の局面において、一定のやり方で協同する一つの枠組、あるいは機構、あるいは恐らく若干の役員仲間だ。構造は、概念を保持し、その概念を社会における人間に役立つようなやり方で、現実と行為の世界にもたらすところの手段を与える」。

4) Von Wiese, a. a. o., 331.

クーリーやサムナーの見解の素描をした (s. 331) 後に、ヴィゼは、彼の先に述べた＜制度＞の定義になお補って、次のようにつけ加える。問題なのは、「かなりの期間一定しており、ある形象における人間や人間集団の連関を、この形象の安定のために維持しようとの目的をもつ」人間間の関係形態の複合体だ、と。制度は習慣や慣習の結果として生じるのを常とする。だがそれは、習慣や慣習に比べてより把握しやすいものであり、目的論的に形象を志向している。そこで問題なのは、「形象の若干あるいは多くの機能に還元されうる意識的・

意志的創造活動、特に（言葉の最も広い法学的な意味での）＜法＞である」。これと同様の区別をサムナーもするのだが、彼はさらに進んで、こう主張する。およそ制度とは、合理的な要素が通常はるかに優位を占めてはいるのだが、習慣や慣習から形成されたものであり、この習慣や慣習の究極的な起源は、ただ深い歴史的研究によってのみ明らかにされうる、と¹⁾。

- 1) 「制度は生成したものか、あるいは法令化されたものかのいずれかだ。制度が生成したものであるのは、それが慣習の形をとる時である。慣習は、本能的努力によって生み出され、その努力によって成長する。つまり、本能的努力は、長期にわたってなされているうちに、一定した特殊なものとなる。所有権、結婚および宗教は、最も一義的な制度である。それらは風習に始まって習慣となった。習慣はある福祉哲学——いかに粗雑なものであれ——がつけ加えられることによって、慣習へと発展する。この慣習は、規則、規定された行為および使用される装置に関して、ますます一定した特殊なものとなる……法令化された制度は、合理的考察や意図の産物だ……」(Sumner, a. a. o., 54)——次も参照。Robert E. Park and Ernest W. Burgess, Introduction to the Science of the Sociology, Chicago, 1924, 766ff.

さて、どのようにして＜習慣＞から＜制度＞が生まれるのか。形象がなす率仕の一定の機能を踏襲することで制度となりつつある習慣は、それによって、安定性や形象との連関、またかなりの持続性を獲得する。「人が人間関係の複合体を制度だとわかるのは、それが社会形象の連関のために果す課題を明らかにすることによってだ。習慣や慣習から——ある程度有機的に——発生する制度は、法やその他の意志活動によって創られた制度よりも、概して、この習慣に根をおろしているということによって、より確実に基礎づけられている。後者の制度は、それが一般的社会的要求や形象の発展状況に照応している場合にのみ持続するのが常である、——いわば、あたかもそれが習慣から生まれ、ただその習慣を明白な形にしたものであるかのように。制度は形象の構造や生活過程に適合しなければならない。でなければ、それは形象を構築するには不適切な単なるみせかけの制度にすぎない。法によって創られた制度のすべてが制度となりえるのではけしてない。もちろん、形象との固有の内的な関係をもたなくとも維持される慣習はあるのだが¹⁾」。この点に関する例としてヴィゼは、法という手段で、外的な強制によって企てられたある国民あるいは種族の制度の、

全く別の国民あるいは種族への移転が、完全に失敗に終わったことをあげている。「習慣なき法は空虚なり」。オルテガ・イ・ガセット (Ortega y Gasset) もまた、彼のローマ帝国に関する論文で、いずれも真の制度には移転不可能性という性質がつきものであることを指摘する²⁾。「ある国民の制度を他の国民へ移し代えようとするところのものは、制度とともに、その国民そのものをも引きずっていかなければならないであろう……政策の模倣は社会病理学の一部をなす。人がそこから制度を取り入れなければならない外国が、我々の目にきわめてはっきりと示しているのは、もし我々が自由な生活を営もうと欲するならば、その制度に特有な存在の深部をあばき出すということが不可欠である、ということだ」。このある程度まで制度がもつ精神的な繋留性と移動性に、ジョン・デューイ (John Dewey) も注目し、こう述べている。「制度を変える唯一の方法とは、人が自らの心を浄化することであり、それがなしとげられるなら、制度の変化は自ら生じるであろう」と³⁾。

1) Von Wiese, a. a. o., 331.

2) José Ortega y Gasset, a. a. o., 170f.

3) John Dewey, *Human Nature and Conduct* (An Introduction to Social Psychology), New York, 1922, 9.

ロス (E. A. Ross) が『社会原理¹⁾』でなした＜規制的＞制度と＜機能的＞制度という分割を、ヴィゼもまた、有効なものとみなしている。ロスは＜規制的＞制度を（社会的な形態を表象する）規範的なものとみなす。「そこでは、人間の関係あるいは行為が一致することが要求される。例えば、男女関係の制度としての夫婦、親子関係の制度としての家族、財の処分の制度としての所有権がそうだ……これに反して、習慣は集団を特徴づけるものではあるが、拘束力のあるものとはみなされない。そわはまさしく社会的慣習であって、本来規範的なものではない……」。＜機能的＞制度とは、ロスの場合、個人的行為が規制された方向に向けられることが要求される、ということによって特徴づけられているのではない。それは、むしろ形象に奉仕することがそれによって明らかにされる、方法によって特徴づけられている。「社会的に整序された形態

で、また不断の社会的援助を受けて、個人の特殊な活動は実現されるのだ。制度は人が社会的意義をもつ奉仕とみなすものを遂行する義務をもつ²⁾」。

1) E. A. Ross, *Principles of Sociology*, 1, Auf, 1920, 485.

2) Von Wiese, a. a. o., 332.

規制的制度をヴィゼは、その妥当性と効力という点で、法的強制の存在と結びつけられているにはおよばないが、一種の規範的なものとみなす。他方機能的制度は、なるほど形象の目的（例えば国家の目的）にも奉仕しなければならないが、それは自発性に基ずくものであって、「形象の（特殊な公的な）目的をたつする手段として機能する」という傾向をもつ点で、習慣とは区別される。「その場合、他の形象の見地からすれば習慣であるところのものが、ある形象の見地からすれば制度と、しかも規制的制度とみなされうる。今日の劇場は、ドイツでは、精神的文化生活の制度とみなされるが、国家においては、習慣の保護のための場とみなされる。決闘は、けして国家的制度ではないけれども、若干の社会層にとっては機能的制度であり、警官にとっては——一定の予防法、規制および制限をもった——規制的制度だ。喫煙は、アメリカインデアンの場合には制度であったが、白人のもとでは（おそらくどこでもただの）習慣だ¹⁾。」

1) Von Wiese, a. a. o., 332.

さて、ここで注意されなければならないことは、社会生活の相互混成や複雑な構造のため、制度と形象との間の境界が消え去ること、また特に、「大きく複雑な形象の見地からすれば制度（従って一の構築部分）とみなされる多くのものが、孤立的に考察するならば形象として現われる¹⁾」、ということだ。従って大きな形象の内部では、下位の（補完的）形象が制度として機能しうるのだ。「家族は国家の制度である。しかし同時にそれは、単に国家より古く、生物学的にいて、より深く根づいているというだけではなく、概して自立的な集合体でもある²⁾。活動的な制度はできるだけ自立的な制度になろうとする傾

向を有する。現代においては、例えば、産業、出版がそうだ³⁾。——制度と形象がそうであるように、制度と習慣もしばしば相互に移行しあう。「習慣」,「制度」そして「形象」とは、発展系列の概念上の段階を表わしている。もっともそれらは類型的には相互に区別されうるとしても、それらを具体的な個々の場合に相互に区別することはむつかしく、まれにしかなされえない。「と言うのは、習慣から制度へ、また制度から形象への推移が、発展の動態においては絶えず行われるからだ。この三つの複合体のいずれにも、人間関係だけは常に存在するから、それらは社会関係という概念で相互に結びつけられている³⁾」。

1) Von Wiese, a. a. o., 332f.

2) 「家族は、つまりはきわめて自然的かつまたきわめて便宜的な社会連関の水路であって、組織のあらゆる局面において大きな役割を果す。従って、家族は通常職業決定において主たる影響をおよぼすにちがいない、というコントの意見から出発する理由は、ほとんどないように思われる。」C. H. Cooley, *Social Organization*, a. a. o., 237.

3) Von Wiese, a. a. o., 333 も参照せよ。

その発展の経過の面に当るのが<制度化>の過程に他ならない。これについては、後に立ち帰って詳細に論じるつもりである。習慣から制度への発展の歩みが、この段階で停止することはまれだ。とりわけ、効率的、機能的制度が問題である場合にはそうであり、この制度はこの制度でさらに形象への一層の変化を内包しているのである。もちろん制度化の経過は、形式上の逆行という危険も内包している。習慣はその制度化によって非弾力的な精神なきものとなるのだ。すなわち「幸が転じて苦となる」。

実際にはどのようにして制度化が行われるのか。ヴィゼは制度化の<下位過程>について次のような例をあげる¹⁾。「人は、<事務所>をつくり、<施設>を設立し、職務年限(在職年限)を確定することによって、<集中><分散>し、<権限>を<分割><制限>し、職務全体を<保持>する……技術的な補助手段として、なかんずく問題になるのが、<昇進>、<名称・称号授与>、<給料>の支払、<警察>の設立、<国営化>および<市営化>だ……他の下位過程は、これらの改造および構築過程に存在する精神を明瞭にする。すなわ

ち、人は制度の理念を強化するために＜教義化＞し＜合法化＞する。＜政策化＞は形象に国家に似た力を与える。昔の＜家父長主義＞は権威・保護の関係を高めて制度となった。さらに人は＜伝統＞を利用し、そこに公的組織の根拠を置いたり、全く＜合理的＞な手段を通じて組織の強化を行ったりする……」。

すでにこれらのヴィゼの例は、具体的な制度化の「下位過程」が無限の形式充足であることを示しており、「組織」(組織化)についての思考を思わせ、確かに、あたかも「制度化」と「組織化」とは広く一致しているかのように見せかける。要するに我々が、こういった考察のもとにとどまり、一方で制度と制度化、他方で＜組織＞と＜組織化＞との関係を論求しようとする場合、さしずめ思い浮べることは次のことだ。組織を実質規定的には全体と部分の関係、計画的な秩序や規則の目的規定的な結合と理解しなければならないということ、この＜部分的秩序＞としての組織という概念は、一連の生活・科学諸領域に適用されるのを常とするということ、従ってそれは、人体、動物体および植物体に関する自然科学に適用されるが、しかしまた、例えば法学や国民経済学および私経済学のような精神科学の領域にも適用される、というのがそれである。この関係の中で、組織を制度（および制度化）という（社会学的）概念と対比しようと望むなら、我々は組織をその社会学的意味内容において把握するよう試みなければならない。

1) Von Wiese, a. a. O., 342f.

人は、ここでもまた、＜経過＞と＜形象＞とを区別する。我々は、（経過とみなされる）組織化を、一定の機能を分割する一の活動、しかも個々の機能ないし部分能率の最良の協働を基¹⁾にして一定の機能を分割する一の活動と解する。これと異なり、組織は社会形象とみなされる。そこでは、主要な機能が分割されつくしており、この機能が一体となって形象の社会的課題を果す。すでにこの定義からして、形象のすべてが制度だとはみなされえなくなる。そこで例えばヴィゼは、＜未組織の関係形象＞と＜組織化された関係形象＞とを対比する。未組織の関係形象が存在するのは、「人間間および人間集団間に、関係

の網状組織が形成された場合だ」。その場合ですら、強力な秩序づけがなされていなければ、それはいぜんとしたただの関係網にとどまる。ここでハルムス(Harms)は＜結合＞言々と言う²⁾。かかる未組織の形象は、群集、群集と集団との中間形態および集合体でもありえる。「＜組織されたもの＞として社会形象が現れるのは、それによって社会形象の目的が果されるべき機能が、部分(個人および個人集団)に分有されている場合だ³⁾」。

- 1) ここでの協働とは、論理的なものというより、むしろ生理学的なものと解される。機能の担い手、すなわち機能的集団が社会的課題を遂行するためになす共働に相当するのは、多くの筋肉すなわち筋肉群が複雑な運動を遂行するためになす共働だ。
- 2) Bernhart Harms, Der Begriff der Weltwirtschaft. a. a. O., 134.
- 3) Von Wiese, a. a. O., 393.

上述したことに従って組織化を、目的と目的実現の間で、また目的を実現しつつある形象の領域内で、機能的な秩序連関を惹起しそれを維持するための合理的活動(その場合「合理的」という概念を過大視して理解してはならないが)と解し、そしてこの活動が、ヴィゼ¹⁾の有名なシェーマの、いわゆる一連の社会過程の経過の中のどこに地歩を占めうるかということを検討するならば、我々は次のような確信をえる。我々は組織化というきわめて一般的な概念を、「我々の全CおよびD過程の一半」、すなわち形象のうちや形象のもとでの結合および分離の全過程の一半と単に「同一視」できるというだけではなく、(ヴィゼによってももちろん先験的にCおよびD過程につけ加えられた)社会形象の新・再構築とその崩壊というEおよびF過程には、まぎれもなく「組織化の経過」が生じうるのだ、という確信がそれである。ほぼ完全に、この関係においては、もっぱらAおよびB過程(第一次の過程)、つまりかの一般的人間的な種のもので、以前に形成された形象の存在を前提にしないそれは、排除されなければならない。組織は整序された形象と関連するから、それは自覚存在的に形象の存在と結びついているのだ。すべての組織化からは、その結果として組織が生じる。従って組織が生じるのは「第一次の過程」外からである。そこで

社会学者は、すべての組織——それが「日常生活において単一体と解されるほどに相互に結びついている多くの現存している社会関係³⁾を表わしているから——を、社会形象とみなすのだ。だから、すべて組織は社会形象を表わしているが、社会形象のすべてが必ずしも普通の意味での組織であるにはおよばない。

1) Von Wiese, a. a. O., 178.

2) Von Wiese, a. a. O., 319.

3) Leopld Von Wiese, Soziologie (Geschichte und Hauptprobleme), II, Aufl. Berlin/Leipzig, 1931, 128.

今や、社会<過程>ものにおいても社会<形象>ものにおいても、一の区別をなすことが、すなわち創造的、構成的意図の支配——換言すれば組織化<原理>の実現——を顧慮して、その区別をなすことが必要だ。それ故に我々は次の区別をなさなければならない。

「組織化された社会過程」と「自然的社會過程」。

<組織化された>社会過程の基礎になっているのは、人間の意図（しかも概してその過程に参加している人間の意図）である。ここでは、目的実現¹⁾、「組織の経過²⁾」が前景に出ているから、我々はそれを「行動過程」言々とも言うことができる。<自然的>社会過程には人間の意図が欠けており、いわゆる「自然的社會変態」の現象が前景に出ているから、それに照応してここでは、例えば「変化過程」という表現が適切であろう、もっとも自然的社會過程も、概して、人間的な影響を受けていない「高度」の目的に役立つのではあるが。なるほど、いわゆる行動過程は、社会的全体現象、特に構造におけるその「変化」を惹起する。だが、我々は変化という概念をむしろ再起的に、つまりこの過程への動因がなんらかの人間の意図から出てくるのではなく、あたかも自然的発展の合法性およびその傾向によって与えられ、それが社会生活に影響をおよぼしうるのだということが、それで直ちに表現される「自己変化」というようなものと理解する。「組織的」社会過程と「自然的」社会過程という前企の区別は、何よりも、方法論的なものだ。と言うのは、そのいずれの場合にも問題は、人間

間の拡張および人間の相互依存、「錯綜したもの」の経過であり、そのいずれもが同じように「特殊社会³⁾」を含んでいるからだ。従って、考えられる社会形象の区別はこうなる。

「組織化された社会形象」と「自然的社會形象」。

＜組織化された＞(ヴィゼの「人為的」) 形象は、意図的、意欲的、合理的に形成されたものである⁴⁾ (「組織化」あるいは「組織する」という適合過程と異なっていて、ここで問題なのは「組織」だ)。それは＜義務的＞性質をおびることも＜随意的＞性質をおびることもありうる。

- 1) 「制度を理解するためには、我々はさしずめ、その制度の目的を理解しなければならない。人がこうしたやり方で制度に接近するなら、制度は人間関係の確固としたモデル、完全に一定の意味をもった現実となる……」 Paul Reiwald, *Vom Geist der Massen*, zürich, 1946. 408.
- 2) ここに使用された組織という概念は、「組織学」にいうその概念よりも、より包括的でより一般的であるということに注意したい。
- 3) Von Wiese, *System……*, a. a. O., 151.
- 4) 「個人は、常に制度の結果でもあり、またその原因でもある。つまり彼は、その伝統が彼を幼年期から包み込んでいる状況の特色を受け入れる。しかし同時に彼は、この状況やその他の諸力によって形成された彼自身の特性をその状況に刻印する。かくして彼や彼と同じく他の人々の状況は変化する」。(C. H. Cooley, *Social Organization*, a. a. O., 314.

＜自然的＞(つまり自然的に与えられた) 社会形象は、人間の意志活動の結果ではなく、それとは関係のない社会体の基礎になっている生活秩序を土台とする、社会構造の自然的範疇のようなものである。例えば、夫婦・家庭生活および種々の血縁集団の形象がそうだ。だがそれは、この形象の問題性が純生物学的なものであるというのとは全く別様なのである。と言うのは、すべての自然的人間形象は「常に社会形象でもあるからだ。しかし社会は生物学的なものと結びついて現れる。母子関係は主たる自然的集団を最も早く形成する。しかしこの対関係そのものは同時に社会過程の系列の連鎖の歴史的経過によって規定されている。このことは、もっと強く夫婦・父子関係、兄弟姉妹集団に当てはまる。自然的形象とは、より綿密に言うならば、すべて自然的・社会形象だ。しかるに、人為的形象は純粋に社会的形象である¹⁾」。ヴィゼは、自らが企てた

社会形象の 1. 群集, 2. 集団, 3. 集合体という三分割を, 一覧表をもってさらに次のように詳列する²⁾。

A. 未組織の關係形象 結合：	B. 組織化された形象：
I. 群集： a) 具体的群集、 b) 抽象的群集。 II. 群集と集団の中間形象： たとえば 隊、 党、 族。	
	III. 集団： A—集団： a) 二人集団、 b) 三人集団； B—集団： a) 中位集団、 b) 大 集 団。
IV. 多くの集合体： a) 第一次： 階級、 身分（現在、同上）、 文化圈； b) 若干の集合体 第二次；特に 初期段階の集合体。	V. 多くの集合体： a) 第一次： 国家、 教会、 經濟団体、 文化および科学団体； b) 第二次 とりわけ發展した段階に おける集合体。

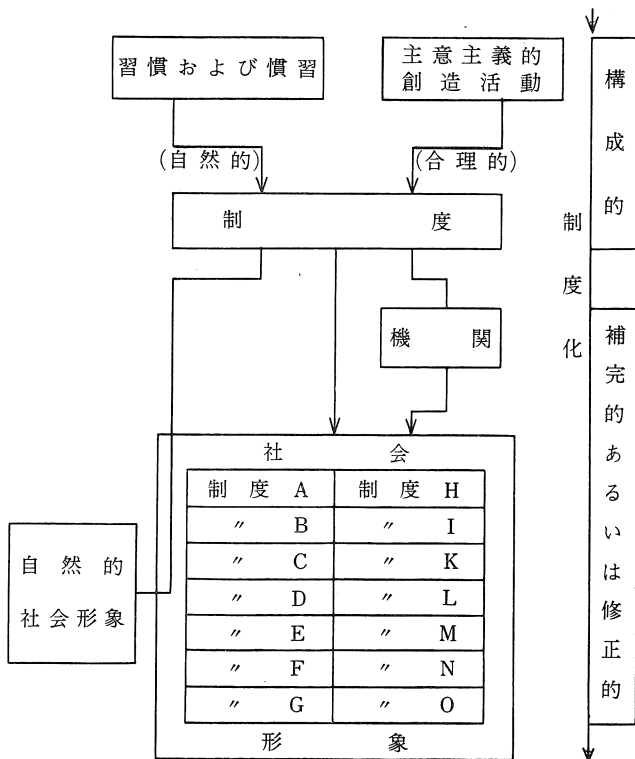
第二次の集合体は、第一次のそれに対してより具体的であり、第一次のそれに、一定の奉仕關係において相對應している³⁾。この社会形象の提示された整序枠組の中で、その基礎とされているのは、すでに私が言及した「未組織の關係形象」（「結合」と「組織化された形象」という水平二分割だ。「群集」および「群集と集団の中間形象」は、例外なく結合であり、これに対して「集団」は、「組織化された形象」である。しかるに「集合体」は、ある時は一方の範疇に、ある時は他方の範疇に組み入れられうる。

- 1) Von Wiese, a. a. O., 359
- 2) Von Wiese, a. a. O., 400f.
- 3) Von Wiese, a. a. O., 400f.

我々が今やこれらの解明を基にして、我々の本来のテーマにたちもどるなら、＜制度＞とは、「一定の人間間の関係形態の複合体」だということがわかる。それは、社会形象という建物の構築部分をなし、＜機関＞の中にその客観的な表現を見い出すことができ、しかも自立化し、従って自ら社会形象となる傾向をそれ自体内在している¹⁾。制度は、習慣や慣習から、いわば社会構造の自然的歩みの中で生育するか、あるいは、若干のまたは多くの形象の担い手の意識的・主意的な創造活動の途上で生育するかのいずれかだ。ここには同時に＜制度化＞という概念のより綿密な解釈も与えられている。すなわち＜制度化とは、さしずめ制度の合理的な目的設定からの創造過程、あるいは制度の習慣や慣習からの展開過程だ＞。だが制度は、自己目的ではなく、社会目的——この目的はつまるところ、ある形象における人間集団の連関を、この形象の統合のために保持しなければならないというように一般化される——に、通常奉仕するものであるから、制度化と記される過程は、制度の展開あるいは創造のもとで止むことはない。それは、多数のきわめて種々の制度から構築されている＜上位形象への新しい制度の組入れという形で絶えず前進する＞。従って、この形象への組入れとは、新しく成立した制度が、すでに存在し構成的に作用しているすべての他の制度に対して整序されることに他ならない。ある制度が「変化」する場合、この組入れは、形象の内部での制度関係の一定の限られた修正を意味する。と言うのは、あらゆる制度、またこの制度と関連しているところのものが、他の社会的活動と不可分に結びついて作用しているからだ。社会生活は諸機能の体系であり、その機能の各々が他のすべてのそれに依存し、それを前提にしているのである。これと同様の思考は、デューイによってもなされている。彼はこう言う³⁾。「いかなる社会制度といえ、ただ一つの支配力の産物として成立したものではない。それは、多くの要因が相互に抑制し補強しあっている現象、あるいはそれらの機能である」と。

- 1) Von Wiese, a. a. O., 331.
- 2) Ortega y. Gasset, a. a. O., 108f,
- 3) John Dewey, Human Nature……, a. a. O., 111.

＜従って制度化の過程は、それ自体の中に閉ざされたものではなくて、ある制度の成立あるいは変化の行程となり、これらの制度の上位形象内部での組入れや整序という、より進んだ行程となる＞。これらの連関は、おおかた以下の図表をもつて表わすことができる。



この図が明らかにしようとしているのは次のような関係だ。すなわち、制度は自然に習慣や慣習から、同じくまた合理的に意志規定的な創造活動からも成立するということだ、(その場合、もちろん従来の習慣が、自然的発展の中ではなくて、意志的な変化を加えられて制度となる場合も考えられる)。次に問題なのは、新に成立した制度が社会形象に組入れられ整序されるということ(制度はもちろんそれを包含しつつある社会形象の安定に奉仕する)、しかしまた、制度は直接的にあるいは社会形象の運行にそくして一つの独自の自立的社會形象にもなるということだ。より詳しく言う、制度が活動的であればあるほど、むしろ事情は後者の方向をとる。確にここで確認されうことは、かかる「社会的構築部分」は、孤立的に考察されるならば形象とみなされるが、より包括的な形象の枠内では制度とみなされなければならない、ということだ。さらに注意されなければならないことは、この図表ではもちろん、制度が本来もつ社会的「裁可」については何も語られないということだ¹⁾。

- 1) 「全く正しかったといえる一連の人間制度、つまりある階級、取引あるいは職業に、いかなる不当な利益も与えられず、公的負担が平等に配分され、完全な公平が支配的であったような一連の人間制度を、かつて見たものは誰もいない。」 James E. Thorold Rogers, *The Economic Interpretation of History*, London, 1898, II, 344. —「ある社会には、そこに存在する制度に事実上同意している者もあれば、反対している者もある。それは、まあまあの不平や不満の状態から暴力的反乱の状態にいたるまで種々である。」 John Dewey, *Freedom and Culture*, New York, 1939, 33.

制度化の経過は——そのように考えると——習慣や慣習から、あるいは合理的な意志活動から、制度をなんらかのやり方で受容する、あるいは制度自らが発展してそれになる社会形象にまでおよぶ。制度化の過程が、実際には通常、同質的な経過をたどるというのは自明のことだ。従ってさしずめ問題なのは、持続的な発展、つまり習慣や慣習から自然的な出発点をえながら、あるいは意志活動に導かれて社会形象の姿を得ようとする持続的な発展である。それでも制度化過程の経過を、少なくとも理論的に二つの局面に区別するというのが、方法論上の合目的性から生じる。すなわち、この第Ⅰ局面は、制度の自然的あ

るいは合理的根源から、制度そのものにまでおよぶ。それは制度の形成であり、制度「構成」の過程だ。故に我々は、この側面を＜構成的制度化＞と名づけた。しかるに第Ⅱ局面は、構成された制度の社会形象への組入れの過程を包み込んでおり、この過程は、形象の＜構築＞あるいは形象の＜再構築＞を表わすことができる。故に我々は、この第Ⅱ局面を＜補完的＞あるいは＜修正的制度化＞と呼びたい¹⁾。「進化的」あるいは「革命的」制度化という名称もまた、ここで問題になっているものにつけられる²⁾。そして最後に、制度は機関（施設）において客観的な形態をとりうるという可能性が、制度と社会形象間の連関の内部にある図表によって考慮されている。

- 1) 「家庭生活、財産、法形式、教会および学校、芸術院や科学院は、意識的な目的に奉仕するために生じたものでもなければ、またその生成が理性と道理の原理の意識によって規定されていたわけでもない。だが、各々の制度は、その発展にともなって、要求、期待、規制、基準をもたらした。これらは、それらを生み出した飾り付けでもない。それらは、追加の力であり、再建をなす。それらは、努力への新しい大道を開き、新たな労働を課す。要するに、それらは、文明であり、文化であり道德活動なのだ。」 J. Dewey, *Human Nature*……a. a. O., 80.
- 2) 「通例、政党は、少なくとも一部の党は、国家を根底から支配しようと努めている。と言うのは、彼らは、一定の制度を廃止しようと、修正しようと、あるいは新に導入しようともくろむからだ。制度とは、特殊な利害を阻止するもの、あるいはそれを促進するものとみなされる、つまり集団が自からの利害のために組織したものだ。」 Franz Oppenheimer, *System*……a. a. O., 11, 658.

一例をあげて、そうした理論的連関を明らかにしよう。経済史は、「一般に」（つまり個々の場合のすべてについては言えないが、概して）商業行為の展開の基礎とされていた一連の商＜習慣＞や商＜慣習＞があったことを認めている。このいわゆる商慣習（これは当然地方によって異なり、その働きは限られている）は、——「取引慣例」の表現として——商業に関する法律行為の解釈と関連づけられうるものであった。だがそれは、さしずめ慣習法であったのではなくて、当時者の意志の働きによって法的な働きをしたのである。絶えざる事実上の慣行によって、あれこれの商習慣はまた、契約当時者の知識や意志と無関係にも働くようになり、従って商習慣を知らないことが責めるいわれのないものであっても、それに保護を与えなくなった。商習慣や商慣習からの制度の形

成というこの過程が、やがてドイツでは、346条の商法典の枠組規定によって法的に規定された。それによると、商人達のもとでは、取引やその中断の意義と結果については、商取引において通用している習慣や慣習が顧慮されなければならないというのであった。民法は、これらの発展を民法典157条および242条によって顧慮し、取引慣習を顧慮した信義や信頼を、契約の解釈や債務者のなす支払いにとっては、決定的なものとした。——商習慣が存在するか否かを精査するために裁判所は、商工会議所を、そのために招集された手段として発展させた。そのかぎりでは、この会議所あるいはこの会議所を通じて形成された専門的判定所は、もともと商習慣であったものが制度化されて客観的に表現されたもの、つまり「機関」だとみなされうる。商習慣の当事者の知識や意志とは無関係な法慣習への発展は、「構成的制度化」の過程を具体的に示している。しかるに、これらの制度の法律における構成や特殊の機能機関の設置は、「補完的」あるいは「修正の制度化」とみなされうる。

一定財の競争価格に、国家の指図に基ずく確定価格、すなわち最低あるいは最高価格がとって代る場合、それに応じて＜合理的＞制度化が生じる³⁾。この制度の「国民経済」という社会形象への組入れは、なるほどそのまま放置しておくこともできるが、通常は、特殊の「施行規定」や「遂行条令」という補助手段をもうけることによって、「国民経済」という社会形象の構造や、その「構成員」あるいは「構成員達」によって合理的に方向づけされた目的を顧慮するであろう。いわゆる確定価格、つまり最低あるいは最高価格（「管理価格」）の制度は、経験が教えるように、価格検定あるいは価格形成所という機関にその象徴的な客観性を見い出すであろう。ここでもまた、少なくとも思考上、二つの制度化の局面が明白に区別されうる。つまり構成的局面には、価格規範の高権的創造が照応し、補完的あるいは修正的局面に照応するのは、市場領域での確定価格による漸次的な競争価格の補填あるいは価格制限による競争価格の防止だ。この競争価格の補填やその防止には、国民経済の規模・給付構造のありえる反作用がもたらす、種々の経済的に考えられうる帰結現象——これはこれで制度化過程の発現の基礎になっていた意図や願望を多かれ少なかれ抑制

する力をもつ——がともなう。

- 1) 次も参照せよ。Ernst Schuster, Der Ordnungswille. als Bestimmungsgrund des Wirtschaftlichen Verhaltens. in: Ztschr. f.d. ges. staatswiss. 96 (1936), 241.

制度化のいわゆる二つの局面の区別が、分析上の目的にかなうのは、その局面のいずれとも特殊な社会学的問題が常に結びついているかぎりにおいてである。構成的制度化は、自然的発展が問題になる場合、社会状況をしばしば変えうることはあっても、その経過が人間の動機が存在によって説明されえるということはない。意志的活動としての合理的制度化は、一定の動機づけによって特徴づけられており、この動機づけが社会状況を「意識的に」変化させる。第Ⅱ局面内での社会過程の要点は、今や（意図せずして、あるいは意志的に）変えられた状況を顧慮する人間固有の行為（行動）のうちにある。さてなるほど、この状況の変化が同じく人間の「行為」の結果だ、しかもその意志によって制度化が惹起された人間の行為の結果だ。だがしかし、制度化がそこから生じる人間集団が、実は、つくられた制度や、そのことによって変えられた社会的状況とその行為によって「係わりあう」人間集団よりも小ないということはしばしばあろう。同一の社会過程、制度化の局面を示すものとして、その状況と行為がヴィゼの分析公式の働きの基礎にもなっている。このヴィゼの公式とは、

$$P=H\cdot S^{2)}$$

であり、それを言葉で言えば、すべての社会過程は「人間行動」と「状況」からの結果である、ということだ。この公式は論理的連関の解明に役立つもので、もちろん数学的厳密さには欠けている。例えこの基本方程式が、制度化の二つの局面に対して絶対的な有効性をもっているとしても、その各々の局面解釈は、恐らく次のようなやり方度が最もよく特徴づけられるであろう。

構成的制度化：

$$P=H\cdot\underline{S}$$

補完的あるいは修正的制度化：

$$P=\underline{H}\cdot S$$

この式では、こういふことが表わされている。すなわち、第Ⅰ局面は、「行為が規定され」、「状況が規定的」に経過する社会過程を含んでいるということ、第Ⅱ局面は、「状況が規定され」、「行為が規定的」である社会過程を含んでいるということだ（この立言はもちろんだた傾向的な多かれ少なかれ制限された有効性を要求しうるにすぎない）。ヴィゼは、彼の公式の分解、つまりHとSを分けることによって、なおこの二重の類型構成を——例えそう明示してはいないにせよ——受け入れる。彼が認めているところによると、行為と状況は、組み立てられた要因である。すなわち、「Hは 1. 多かれ少なかれ生来の素質（I）と 2. 一定の経験（E）の結果だ。素質と経験（遺伝と適応）、過去の影響——例えば青年期の関係——が、調べられなければならない。従って $H = I \cdot E$ となる。状況（S）の場合にも同様に二つの要素がある。すなわち、外界の所与のもの（人間の外的環境）（U）と、当面の過程に参加させられた他の人間の行為（ H_1 ）とがそれだ。ここでもまた、一方の要因が他方の要因に対して軽視されてはならない。時として外的事情（時間、天候、気候等）が過程の推移に大きな意義をもつ。従って $S = U \cdot H_1$ となる」。かくして次の公式が成立する。

$$P = I \cdot E \cdot V \cdot (I \cdot E)_1 \cdot$$

- 1) 「……我々は、人間の進歩が、知性の導きの産物であったということがいかに少く、偶然的な激変の副産物であったということがいかに多かったかということを知っている、——例えある特権的制度のために弁護しようとその関心から、単なる偶然を後に変質して、それを神意とすることはあっても。我々は、戦争の衝突、革命の圧迫、英雄の個人の出現、戦争や飢饉によって生じた移民の圧迫、野蛮人の侵入に左右されて、確立された制度を変えてきた。今まだ使われたことのない刺激を絶えず利用して絶えざる再建をしてきたというのではなくて、我々は、抑圧の蓄積が慣習という堤防を突然つき破るのを、ただ待っていたのだ。」 J. Dewey, Human Nature……a. a. O., 101.
- 2) Von Wiese, a. a. O., 165f.

さて、ヴィゼの上に見た叙述を引きあいに出せば、我々は＜構成的＞制度化を $P = H \cdot S$ をもってする代りに、次のように記号化することができるであろう。

$$P = H \cdot U \cdot H_1.$$

第1局面の「状況が規定的である」という意味は、社会過程への他の（いわゆる第2の）参加者達の行動様式（ H_1 ）にとって規定的なものとしてすぐさま現われる。それ故に $P=H \cdot S$ という公式には、もっと綿密に言えば、次のそれにとって代る。

$$P=H \cdot U \cdot \underline{H_1}.$$

そして今やなお公式的に＜自然的＞制度化と＜合理的＞制度化の区別、つまりすでにに引き合いに出した第1局面の二つの考えられうる可能性を考慮するならば、それを我々は次のように示しうる。

自然的構成的制度化： 合理的構成的制度化：

$$P=H \cdot U \cdot \underline{H_1}$$

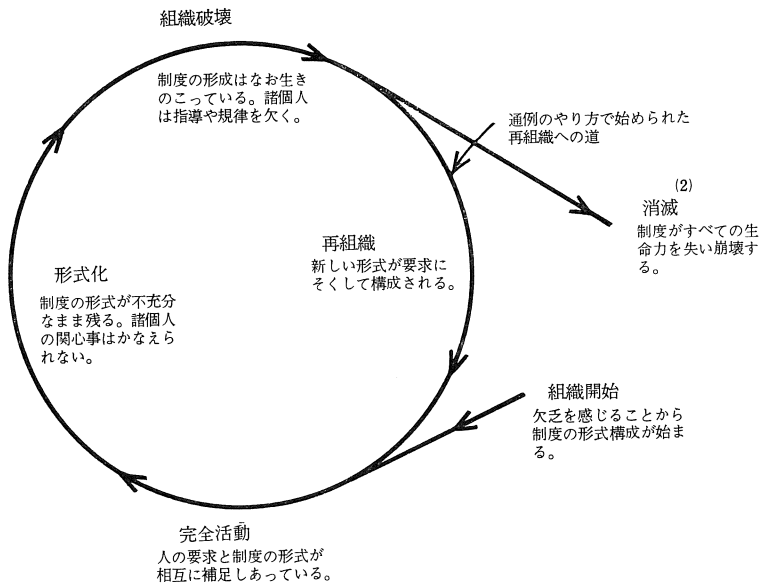
$$P=\underline{H} \cdot U \cdot \underline{H_1}$$

この式では次のことが表される。すなわち、第1の場合、その誘因が生じてくるのは、なるほど「人間外的なもの」ではないけれども、とにかく個人あるいは諸個人（「社会形象」における団体の比較的大きなあるいは小さな部分と解される「諸個人」）の意志や創造活動の外部にある、恐らく主として、「歴史的に」解されるべき社会界（しかも特に社会界で一般的でそれを特徴づけている「習慣や慣習」）（ U ）からだ、しかるに第2の場合、その誘因は構成的人間あるいは人格集団の意志活動や行動様式（ H ）から生じてくる、というのがそれである。

こうして展開された二つの局面の区別は、制度化過程の一様性や発展上の緊密性を破壊するのではなく、制度化の経過の分析を方法論的に容易にすべきものだ。もっともそれには「自然的」制度化と「合理的」制度化という＜横の＞区別が、「構成的」制度化と「補完的・修正的」制度化という＜縦の＞区別を通して、社会的現実のうちに基礎づけられて完全なものにされなければならない。と言うのは、制度の本質を機能的および構造的な問題として問うということは、社会的現実から生じるからだ¹⁾。

1) W. G. Sumner, 「Folkways」, 53f を参照せよ。

先に我々がなしたのが、制度化の構造的な問題の図式的な説明であったとすれば、ここでは主として、その機能的視角からする図式シェーマを取り上げたと言えよう。C・H・クーリー、R・C・エンジェル (Angell) および L・J・カール (Carr) の¹⁾ (初期組織, 効果, 形式化, 組織破壊という) 4つの制度化期間の区別にならい, そしてまた, それにつづく従来の制度の再組織化かその崩壊かという二者択一を顧慮に入れるなら, 我々は制度的発展の循環について次の図表を得る。



1) Charles. H. Cooley, Robert C. Angell und Lowel J. Carr, Introductory Sociology, London, 1933, 406ff.

2) この表現は、言語的にいえば余り適切だとはいえないにせよ、ここで問題になっているところのもの (英語でいう「disintegration」) を最もよく示している。

我々は「社会生活」を、制度および制度化の構造と機能の解明にとっての出発・手掛の基礎としたのだが、その理由はこうだ。——制度派経済学も明らかに「社会的なもの」の領域にその起源を発しているからであり¹⁾, また二つの

現象（すなわち「社会」形象と「社会」過程）の社会学的考察にあつては、あらゆる社会学的な研究作業の場合と同様に、社会の本質解明・解釈が、窮極的な目的として常にその念頭に浮ばざるをえないからだ²⁾。しかるにその場合、心理学者、歴史家、文化哲学者あるいは形而上学者の目をもって、ここにあげた問題を見るということはさほど問題ではないのである³⁾。だから我々は、「制度」および「制度化」という概念の社会学的解明をする際、それを、人間間の生活の表明つまり社会の全体関連から表明したものと解したのだが、次にそれとは全く逆に、「制度」から目を社会的、経済的生活に転じよう。と言うのは、制度と社会との間の相対応した方向での相互作用が、すでに制度の発生、「構成」において表明され、認識されているからだ。制度の社会的基礎との繋留性について、オルテガ・イ・ガセットは、明白な具象的比喩をもってこう言う⁴⁾。「過渡の際に我々をおびやかす岩は、切り離されて海に漂っているのではなくて、海底山脈の不可分の構成要素を成しているのである。この山脈の頂点がその岩なのであり、この岩だけが目にみえて浮び上っているのだ。制度についても全く同じことが言えるのである」と。

1) 「経済社会学者は、経済理論家であって、経済実証家や経済史家に対立している。より詳しくいうと、およそ経済理論は、すべて経済社会学なのである…」Werner Sombart, *Nationalökonomie und Soziologie* (Kieler Vorträge, 33) Jena 1930, 12.

2) Von Wiese, a. a. O., 4.

3) Von Wiese, *Soziologie*……a. a. O., 123.

4) Ortega y. Gasset, a. a. O., 171.

我々は、従来の論議も、制度及び制度化という社会学的概念の中に取り入れるという意図でやってきた。社会関係の科学は——そう見てくると——ある意味では制度の科学、つまり社会をそれにふさわしい多種多様な機能を遂行するような状態に置く制度の科学として現われる¹⁾。我々の研究の中心概念の、こうして言々された社会科学的分析は、今やそれにつづいてなされる社会科学的（しかも何よりも経済理論的）な方向についての論議の中で、定義や我々の観点に必要な明白さを得るために欠かせないものであった。ここに言う方

向とは、一連の特に北アメリカの経済学者達が、経済的現象の叙述、つまり社会経済的發展過程や社会構造の説明に、適切な手段として役立つ方法論を与えようと努力して、この10年間とってきた方向であり、また一般に「制度学派」と呼ばれるのを常とするそれである。

- 1) 「社会関係の科学は、実際に、社会にその無限に変化のある機能を遂行させる制度についての科学である。個人の諸単位からなる一集団の行為を包括している社会の特徴のおよそが、制度を示している。そしてこのことは、社会そのものの起源や発展を説明するのに使われる理論を顧慮しなくてもいえるのだ。と言うのは、その起源がなんであれ、家族、種族、国民あるいは何んらかのその中間組織が、規制、統治あるいは防禦という目的をもつのであって、そのおよそが、相互に関係しあっている諸個人によって創り出された制度だからである。」 Carroll D. Wright, *Outline of practical Sociology*, New York, 1909, 1.

序説の最初の論述で我々は、何々「主義」という用語のすべてが、その語根と本質的に結びつけられた思考複合体を一面化したものを表わす、と立言した。制度主義という概念においても同じくかかる一面性は表れている。言うなれば、＜経済的現実、その歴史的变化の過程でもその一時的な現象でも、経済的制度的変化している構造からのみ正しく理解され解釈されうる＞のだ、という制度主義特有の考え方がそれだ。経済的現実なるものへの理論的接近は、およそ一定の側面からのみなされうるものにすぎない。人は通常、ある点に同時に多くの側面から接近することはできないし（人がこの接近をそれとは別の基礎から発している他の接近と協同してなすというのでなければそうである）、またこの自然必然的な「観点の一面性」を偏執狂的発作と見ることも正しいとは思えない。と言うのは、まさしく科学的整理とか批判には、主観性（「主観主義」とは厳密に区別されなければならない主観性）という特色がつきまとうからだ、もっともこの科学的な整理とか批判は——それが「真理」を得ようと努めている場合——「真理」に近づけば近づくほど、それだけ客観的なものになるのではあるが。しかしながら、認識を求める主観的努力のこうした客観化は、まさにただ「対象」からのみ、つまり研究志向の現実との即応性においてのみみなされうる。とすれば、専門科学的研究者のカタログが「学派」、方向、教

義(従って主義)のうちに、その整序原理を見い出してきたということも明らかにされ、理解もされうるであろう。すなわち、主観的認識を客観化することが不可欠だという意識に促されて、その各々の考察視角をもつ他の理論家達が、彼らの認識志向の統一と協調を目指し、かの同一方向に向けられた分析に関心を抱くのである。と言うのも、この「同一の志向」が分析され解釈されるべき対象に関してのそれなのであり、従って客観性の、すなわち現実の科学的認識の一般的妥当性の外枠であるからだ。そこで注目に値すると考えられるのは、かかる「学派」の内的緊密性の度合が一定していず、時おり学派表面の認可をいぶかしいものにさせているということだ。

こうした展望のもとで、制度学派の内的志向と緊密性がどのように表れているかということが、我々が次にそれに答えようと試みる問題である。その際我々は、この問題への接近を次のようなやり方で行うであろう。つまり我々は、いわゆる<知識史的帰納法>を用いて<制度主義経済学説の全体像を得よう>と試みる。——何故なら、個々の研究人の精神・主観的多様性に直面しては、ただそうすることによってのみ制度主義的見地の共通の特質を明るみに出しうろと思えるからだ。

<制度主義>とは、特にアメリカ国民経済学の一志向を意味している。それは、ソースタイン・ヴェブレン(Thorstein B. Veblen)によって基礎づけられ、彼が純粹理論および孤立的方法を排除したことによって、古典派および新古典派の国民経済学と対立している。彼の信奉者達は、事実上の社会的および経済的制度の精密な、統計・経験的な記述を弁護するのだが、その際彼らは、一般社会的、心理的および法的諸要因の因果発生学的な研究を志向する。「自然主義的」理論は、経済現象の原因を過去に、「心理主義的」理論はその原因を現在に求めるのに、「制度主義的」理論は、なにかんづく現実の経済的活動の作用と、未来において、しかも主に社会組織の制度的構造とその発展を顧慮して係わりあう。なるほど制度学派は広範囲におよぶ否定的で反抗的な文献は出してはいない、しかしまた「その方法と目的が引合いに出されるような建設的な著作も出してはいない¹⁾」ということは、制度学派がもつ一つの残念な欠陥だ。

ガエタン・ピルー (Gaétan Pirou²⁾) は特殊な 制度主義的光学の形成を次のような四つの推移という形で総括した。すなわち、A) 過去から未来への推移、B) 個人的行為から集団的行為の推移、C) 理性から慣習への推移、D) 交換から取引への推移というのがそれだ。制度主義的志向の信奉者、つまりベアード (Beard)、クーリー (Cooley)、デューイ (Dewey)、ダグラス (Douglas)、ハーレー (Hale)、ハミルトン (Hamilton)、ステュワート (Stewart) タグウェル (Tugwell) 等については、次により詳しく語られるべきであろう。

1) Frank A. Fetter in: Die Wirtschaftstheorie der Gegenwart I, Wien, 1927, 52.

2) Gaétan Pirou, Les Nouveaux Courants de la Théorie Economique aux Etats-Unis, Tome II: L' Economie Institutionnelle, II, Aufl. Paris 1939, 157ff.

※ 以下次号予定